

## パーキンソン氏病に対する歯科治療

中央区 新神戸歯科 鈴木 真夕（歯科医師）

### <目的>

パーキンソン氏病は中脳の黒質異常によりドーパミン量が低下し、黒質から線条体に向かう情報伝達経路に異常が生じ、姿勢の維持や運動の速度調節がうまく行えなくなるなど、特有の症状が現れると考えられている。主に、手足の振戦、運動遅滞動、筋拘縮、姿勢反射障害などが知られている。今回は、医科においてパーキンソン氏病と診断されドーパミン製剤などの投薬が著効を示すものの、再発を繰り返す症例。及び、各種の薬物療法に抵抗を示す2症例に対し、歯科治療を実施しその効果を検討した。

### <方法>

症例1：59代女性、6年前に発症。ドーパミン製剤が著効を示すが、薬がきれると再発する。病巣感染を疑い、根尖病巣含有歯を抜歯した。

症例2：62歳男性、約9年前に発症。各種薬物に抵抗を示し、来院時にはほとんど運動不可能の状態であった。感染根管治療および感染歯質除去を行った。

### <結果>

症例1：抜歯後約20分で、運動機能は著しく改善し、治療前に自覚していた膝関節痛も改善、構音障害も改善した。

症例2：治療直後に自立歩行が可能となり、1か月後には、歩行など運動機能が改善し、早歩きができるまで回復、表情も改善。

### <考察>

パーキンソン氏病の本体は脳の黒質病変と言われているが、根尖病巣や感染歯質が脳の黒質にまで影響をしていたのではないかと推察する。膝関節痛が改善したのは、脳の前頭前野の機能異常が感染病巣により誘発された結果と思われる。また構音障害が改善したのは歯牙感染が言語中枢にまで及んでいた可能性がある。パーキンソン氏病は難治性で罹患者が比較的多いが、歯科医科の連携を実施し、歯科治療の作用機序の解明などを進める必要があると考えられるが、歯科治療により改善した経験は今後の歯科医療の進歩に重要な意義があると思われる。